京都大学新聞
学生団体 京都大学新聞社
京都市左京区吉田 京都大学構内 京都⑦8111(学内142甲) 振替・京都3909 1部(10円)

加茂川畔の 新年会、忘年会、追コン 旅館 清州 河原町今出川電停前 TEL (23)1750・8776

選挙期間問題で紛糾
教養部自治委員会

選挙期間 十二月一日から七日か 二十九日の自治委がカギ

教養部自治会正副委員長、同学会代議員選出などを含む、後期教養部選挙は、現在選挙管理委員会を、常任委多数派を占める統一派が、二十五日に五人を決定したため、五人のうち三人を占める統一派系選管の方針で行なわれることになると見られる。

二十六日前期解散自治委員会が四十番教室で行なわれたが、統一派系自治委員が社共統一行動に午後から参加したため、再度二十九日に自治委員会を開き、解散するもよう。しかし、この二十九日には統一派の選挙方針と、委員長方針とが対決するものと見られ、この日の自治委決定如何で、京大学生運動の鍵を握る教養部選挙にかなりの影響を与えることになりそうである。

二十五日には同学会解散代議員会が行なわれ、後期選挙は十二月一日から七日までの七週間が選挙期間とされたので、学部での選挙が早めに進められ、教養部での選挙はややテンポがずれている。しかし二十七日には教養部構内に統一派系教養正副委員長候補のビラがはられており、今後の選挙方針等に関してなお問題をはらみそうである。

解散二十九日に持越 教養部自治委員会 民青系はボイコット

十一月二十六日午後三時四十五分から、四十番教室で、前期教養部の解散自治委員会が開かれた。開会時は出席自治委員数が定員数に満たず、自治委員集会として開かれたが、午後五時出席六十九人議長委任十七人、計八十六人で定足数に達したため即時自治委員会に切り換えられた。

自治委員会では、委員長の基調報告に続き「11・26日韓批准抗議社共共闘集会に参加しよう」「12・2社共共闘に、府学選・反戦青年委の下に結集しよう」「12・8反戦委集会に参加しよう」などの委員長提案をうけ、統一会議からの「第二〝府学選〟デッチアゲ反対」などの対案を受けたあと、五時五十分頃、拍手でもって委員長提案を確認した。

この日統一派は、11・26社共共闘集会に参加するため、全学連集会に参加し、この自治委員会をボイコットした。その結果、事実上主流派のみの集会となったため、後期選挙方針などの統一派との対決点を、単独で採決することを避け後日の自治委員会に譲って委員長提案を採択するに留まった。

このあと主流派は円山で開かれた11・26集会に参加した。

教育学部自治委員改選 反民青系が独占

さる十一月十八日、教育学部自治委員の改選・選挙が終わった。今回の改選では九人の自治委員に対し、民青・統一派系から二人、反民青系から九人の候補者が立ったが、日韓闘争、学内ゼミナールなどで地道な活動をつづけている反民青系候補者九人全員が当選した。なお新自治会委員長には前期に引きつづき大村醇吉君（三回生）が、また副委員長も前期と同じく松岡□君（三回生）が再選された。

日韓闘争最終段階へ
12・8に府学連統一行動

衆院における議長職権行使による日韓条約、協定の強行採決を転換点として、日韓闘争は、やや混迷の中を進行しつつあるが、十一・二六社共総評統一行動を手始めに国内三法の批准阻止の闘争の組織化が深められつつある。

十一・二六社共総評統一行動日には、円山公園での全京都府民集会が持たれ、京大においても学生数十人が参加した。十一・二六以後、十二・二総評・反戦青年委統一行動　十二・三京大一万人集会、十二・七中央反戦青年行動委　十二・八府学連統一行動、十二・九社共統一行動のような闘争スケジュールが組まれており、日韓闘争の最終段階を迎えようとしている。十二・八は関西三府県学連統一行動が追求されていた模様であるが大阪府学連の主導権を握る阪大（民学同が多数派を形成している）が十二月上旬選挙に入るので、不可能と見られ、太平洋戦争勃発記念日としての不戦の集いとしても府学連統一行動が持たれる見込みである。

また既に閣議において正式に定決された国鉄運賃値上問題は、日本帝国主義の現局面を解明するものとして、日韓闘争以後の主要な課題となると見られ、今後、日韓闘争をも併行させるなかで、値上問題を深化させつつ、徹底的な日帝の本質暴露が行なわれることと見られる。

教会も壁で隔たれた。壁に沿って幾つも墓が見える〝脱出〟に失敗した人々だ。左の墓銘は「それでも我々は兄弟である」。手前は西独の兵士。

世界のわかもの 13
私達は『政治世代』 不安は西ドイツ核武装
東ベルリン

ベルリーナにとって、ボクラに与えられている特権は、〝マウワー〟（壁）を越える権利である。ある時東ベルリンへ行った。五十米幅のこの検問所が、その日は唯一の東西の窓であった。そして、そこを約四十分かかって通る。ボクのポケットから記載洩れのドルと「ニューヨーク・タイムズ」が発見されたからだった。これは東ドイツにとって敵性文書にも等しいからだ。読者は、ボクが持ちあわせの本を「マルクス・エンゲルス選集」であるといつわったことを容赦されたい。もしボクが真実を語ったら、オオエ・ケンザブロウやオダ・マコトとはいかなる人物かを係官に説明するためにさらに半時間を要したであろうから。

なにしろ六時までに西欧陣営に戻ることを強制されているのだ。

西ドイツの人々は、東のことをより美しくユーバー・デイ・エルベ（エルベ河の彼方）と呼びならわしているのだが、ドイツ人ことに東ベルリン人にとっては、ロマンチックを通りすぎた日常の思考に必ずまつわっている切実な問題なのだ。一般に「エルベの彼方に自由は」と西側の人々は言う、「自由がないんだ」と。だがボクらが見るとき、〝一般的に〟自由を語ってもそれは何の意味も持っていない。ことに社会主義国家に居る時、国民の前にある〝鉄の規律〟（レーニン）が国民を拘束することは十分にありうるのだ。

ウルブリヒト東ドイツ共産党の官僚主義が数々の失策を犯していることを多くの国民が認めつつも、彼らは東ドイツが資本主義国家と比較して自由であることを認める人々は多い。

「殺人はその他多勢より平等」と題した、その日の新聞の論説を例にとれば次のようである。「資本主義国では所得税というものによって労働者は極度に縛られているが雇用者はそうでないということを忘れてはならない。労働者は資本家の同意なくして賃金を上げることができないが、職制は、労働者の同意なしで、価格を、従って利益を上げることが自由である。」

東ベルリン・ピオニール・センターで訓練に励む子供たち

〝壁〟が東ドイツ国民に与えたショックは大きいに違いないと思われるが、それを確かめるにはずっと多くの時間を経なければならないだろう。最近出版されたクリスタ・ヴォルフ女史の小説「分たれた空」は東ドイツ共産党の抗議にも拘らずベスト・セラーとなっている。主人公の娘のリタと恋人マンフレートが〝壁〟ができる直前に西ベルリンに逃れ、二人は恋の心が行きあえるよにと、ひとつの星を決める。「少なくとも空だけは誰にだって分けられないから」けれどもリタはイデオロギー上の問題からマンフレートと別れる決心をして東に戻るという筋書きである。

「〝壁〟世代」というものはまだ明確には現われていないが、それはより本質的には、「政治世代」として代表されているといってよい。このコトバについてやはり上記の「分かたれた空」のクリスタ・ヴォルフが次のように表現している。

「私たちは所謂政治世代なのだ。私たちの世代の進歩は同時に新しい社会の進歩だった。世界観を形成する年令にあって、かつての偽りの理想は崩壊していったし、ナチ帝国と共に、偶像とブルジョワ的理想など全ての汚物は流れ去った。政治は私たちにとって死活の問題だったのだ」〝反ナチズム〟が〝壁〟に対する抗議以上のものをもって脈々と生き続けていることは西ドイツの青年以上に明きらかである。

ボクらは東ドイツの「政治世代」の思想のなかに両ドイツを代表する〝抵抗〟の伝統を見たい気がするのだ。現在かれらのもっとも大きな不安は悪評なウルブリヒト政治以上に西ヨーロッパことに西ドイツ核武装に対する恐怖である。日々の東独の新聞もこれについてかなり詳しいニュースを流しているし、これの実現が同時に両国民の望む「ドイツ再統一」を決定的に不可能にするばかりでなく、はっきり同国民に向けて核弾頭をつきつける悲劇を現出することになるからだ。「そうでなくても、ナチ刑法がそのまま今でも適用されている西ドイツと一緒になることはできないけどね」とハンス（仮名）が言った時、今まで黙ってボクらの話を聞いていた両国のおとなは明らかにそれに賛意を送った。マルクス・エンゲルス通りのとあるレストランであった。（本紙・長沼編集員）

スポットライト
音楽への慣れを恐れる
京大オケ演奏会でチェロを客演する 安田謙一郎君

今年の京大オーケストラ定期演奏会で、ドボルザークのチエロ協奏曲のチエリストとして客演する安田君は、先月三十一日の毎日音楽コンクールで、今年度の一等賞を獲得、いちはやく世間の注目をひきだした。突然の受賞は当の守田君はもとよりオーケストラ、メンバーも一段と励みになる快挙であったに違いない。

同協奏曲の第一回コンチェルタントの練習にやって来た安田君、翌朝は早速東京へとって返す。当分この往復が繰返されるわけ。出発前の早朝比叡山ホテルに彼を訪ねた。

—京大オケとの合同練習はどうでしたか？

「この協奏曲は、サンサースやボッケリーニのと同じく、コンチェルタント（協奏）ですごく合わせにくい曲なんです。でもオケの方がよくついてきてくれたので助かりました」そして、オーケストラ部員にいわせれば「チェロの音色を日本人がこんなに美しく出すものか」とおどろきの声をあげた次第。日本舞踊の家元に生まれ五歳のときからチェロの弦を握った安田君は今二十一歳、腕に一段とみがきのかかったのが、去年の夏を過したアメリカでのサマースクールだった。我が国楽団のホープである桐朋学園大から数人が渡米、かれは、ニューヨークのジュリアード四重奏団のアダムズ氏に身を寄せて練習のかたわら、マサチュセッツのボストン交響楽団、同ダングルウッドの音楽祭を始め各地で練習と音楽会に参加することができた。

「ニューイングランド地方のインテリは日本びいきで親切です　洋楽についてはアメリカ人の優越感もあると思いますけど、とても親切にしてくれました。邦楽はでもよく消化できないようですね」

彼は、日本には、〝ムダな音楽〟が横行しすぎているという。あまり音楽があふれると音楽を聞きたいと思わなくなるからという。〝ムダな音楽〟—誤解され易いコトバではある。「音楽の大衆性を否定する気か」「クラシック優越主義か」等々と。「そうじゃないんです」と彼は弁明する「大衆化は結構です。けどマンネリになるのは困る。音楽は〝日常生活〟そのものではないんですから」

およそ日本に限らず、あらゆる文化的作品—シンボル—が、人々を感動させなくなっているという皮肉な文化現象は先進に一般的になっているのだ。幸か不幸か。雑音ばかりの二、三枚の18回転レコードが、まさに決定的に人々を感動させた時代があった。ボクらはいまステレオ音楽においそれと感動しないことがある。幸か不幸か。ボクらは、安田君の次のコトバのなかに、不幸を幸に逆転していく、エネルギーを期待することにした。彼に聞こう。—こんどの抱負は。

「体力的に西洋より遅れないかと不安です。それと音楽に慣れてしまって、気力が磨滅することを恐れています。」

話に気がはいりすぎて、安田君は数秒のコトで〝ひかり〟に乗りおくれるところだった（長）

同大学館闘争終る
学生側に管理運営権

管理運営権・維持費等の問題をめぐり紛糾していた同志社学館問題は、団交を拒否していた学長が突然団交を受諾し、十八・九の両日の団交にて大学側が譲歩を示した。①管理運営権は学館委員会に属する。所有権、人事権、予算権は学長にある②館長は置かない。学館委員会の互選によって構成メンバーのうち教員が学館委員長となる③維持運営費は学内団体による無料催しものに関しては徴収しない④委員会の構成メンバーに関しては一部学生14人、二部学生6人、大学院生1人、教授会6人、教職組1人、職員代表4人とする、の四点が確認され、近日中に開かれる学部長会・理事会で決定される模様。またこれと平行して仮称「学館規約起草委員会」の設置が急がれている。まず十八日開かれた団交に於て①②③の三点が確認され、続いて④について討論が行われたが話し合いがつかず、翌日の団交にて学生案が受け入れられない場合自主入館をもやもうえずとの態度を示し解散した。続いて一三〇〇人の学生を集め全学々生大会が開かれ、自主入館反対声明を出した体育会・統一派（民青）の分裂活動が行なわれたが、賛成六三八、反対五一、保留五七で中執提案①十九日の団交で学生案がのまれないときは自主入館する②また学長に抗議するため全学スト権確立など七点が決議された。十九日午後二時から再び団交が開かれ、学校側から学長、各学長、学生側から学友会委員長他二〇〇名が出席した。当初大学側は両者同数を主張してゆずらず平行状態をつづけたが、六時半議長あっせん案が提出され双方ともこれを承認した。

燃料化学教室焼く
現存最古の赤レンガ

去る十七日午後六時十分ごろ、本部の工学部燃料化学教室の二階建レンガ造りの西南かどの第一講義室の床下物置き付近から火が出て、床約百平方メートルを焼いた。火は七時頃消えたが、火の気のないところなので、おいてあった薬品の自然発火か漏電とみられる。燃料化学教室なのでエーテルなどの危険物があり、一時は薬品の運び出しなどで混乱した。

上昇する生活費
39年度生活実態調査から
女子学生の1/4が喫煙

学生部ではこのほど昭和三十九年度の学生生活実態調査の結果をパンフレットとして発表した。これは昭和二十八年度いらい毎年続けてきたもので、今回は十二回目にあたる。調査対象としては層化無作為標本法により抽出した大学院生の四分の一、学部男子学生の十二分の一、及び学部女子学生の全員となっており、これは全学生数の約一四％にあたる。なおその回収率は七四％であった。

調査結果のうち主なものを項目ごとにあげると次のようになる。

▽出身地および家庭状況
近畿全域からの出身者は五七％と前年とあまり変化がないが女子は近畿出身者が増加している。家庭の職業はサラリーマンが六〇％と圧倒的に多く、年収も一〇〇〜一五〇万円の層を最大に、かなり増加している。

▽学資状況
学資は自宅通学者の月平均額が八、一二三円で前年より二三％増、自宅外通学者が一七、一八四円で前年度より一四％増となっている。特に自宅外通学者では一三、〇〇〇〜一九、〇〇〇円の支出額が全体の六〇％を占めている。このうち自宅月報、いわゆる「仕送り」は自宅通学者で三、六一〇円、自宅外通学者で一二、四二三円となっており、これと月額学資との差額がアルバイト、奨学金などでまかなわれるわけである。

▽アルバイト状況
全体の六四％の学生がなんらかの形でアルバイトをやっており、これは前年と変らないが、教養部学生にアルバイトをしている学生の割合が減少しており反対に文科系専門部の学生の割合が増加しているという現象がみられる。希望度としては約半数がなかなか適当なアルバイト口がみつからないといっている状態で今後の開拓が期待される。また希望職種としては約八五％が家庭教師を希望している。アルバイトで得る月収は四〇〇〇〜七、〇〇〇円が五五％を占めており、これは前年度と変らない。

▽住居状況
自宅通学者は三一％、下宿、寮、アパートからの通学者が六三％と昨年より増加している。特に女子に自宅通学者が増加したのは、京阪地区以外の出身者の増加のためとみられる。一人当りの畳数では三畳から四・五畳が五五％と大半を占めているが、部屋代は賄なしで平均三七一一円、三〇〇〇円以上が半数以上を占めているが、教養部学生では四五〇〇円以上が五〇％もいるのは、新規入居者に対する下宿料の値上げが原因とみなされる。賄つきでは八〇〇〇〜九〇〇〇円がほぼ平均とみられる。

▽支出うちわけ状況
食費はだいたい七〇〇〇〜九九〇〇円がおもで、ここ数年の食生活の向上がうかがわれる。書籍費は一〇〇〇円〜三〇〇〇円といったところだが、専門課程の方が教養課程をかなり上まわっている。嗜好品については、毎月の計上費が二〇〇〇円未満というのが七〇％ぐらいであり、一〇〇〇円未満は五〇％を占めている。このうち飲酒代を計上しているのが四〇％、タバコ代では五五％となっているが、女子で飲酒代、タバコ代を予算に計上しているのが二五％というのは、京大女子の強さというか近代性というのか、ちょっと信じられないくらいである。※

▽その他
スポーツをする程度では全然しないものが二七％もおり、前年よりも少しではあるが上昇しているのが注目される。とくに文科系専門男子よりも理科系専門男子がスポーツに対して積極的であるという傾向は前年と変らない。旅行については三十年四月以後十月までに旅行した学生はほぼ七〇％であるが、旅行をしなかった学生が前年よりも一〇％増加しているのが注目される。

またパチンコ、麻雀代については教養部学生で「有り」と答えた者が減っているのに対し、専門部学生に増加がみられる。映画、音楽会、演劇代については八五％が予算に計上しており、月額も昨年より二五％増の約七〇〇円となっている。

工教学友会 開かれる

十九・二十日の両日工教自治会BOXで、全国工教学友会が開かれ、十一名（無期停学二名を含む）の大量処分を出した横国大、自治会訓告処分の出た京大に対し処分撤回支援闘争を推進することが採択され、続いて今までのスローガンを確認した後、前回所長会議で提示された専攻科案について討議が行われた。席上東工大から専攻科案反対の提案が、阪大から専攻科スローガン化が提案され紛糾したが、京大他工教が正式態度を保留したため、次回持越しとなった。

加藤登紀子リサイタルに人気

さる二十日、時計台下大ホールにおいて、シャンソン研究会主催の加藤登紀子リサイタルが、約五百人の聴衆を集めて、盛大に行なわれた。この日は、加藤さんのほかに山崎□さんが、特別出演し、渋い調子でモンタンの歌を唱い、大向うを唸らせた。加藤さんは、東大四年生で、かつて劇研に参加したこともある。

第7回 懸賞小説募集

本社では第七回懸賞小説募集を行います。既成の観念にとらわれず、新しい視角からこの錯乱の現代にアプローチする新人を登場させるというのがこの企画の意図です。今は「文学」氾濫の時代であり、また沈滞の時代でもあります。それだけに一層、新鮮な文学が要求されています。

過去六回の募集には、全国大学諸兄姉から多数のご応募をいただきましたが、前回は入選作なしという低調さでした。今回は昨年同様、井上光晴、野間宏両氏に選者をお願いすることになりました。諸兄姉の力作を期待します。

選者　井上光晴氏　野間宏氏

井上氏

野間氏

応募規定
- ◇応募資格　大学、大学院に在学中のもの（学外内を問わず）未発表のものに限る
- ◇枚数　500字詰原稿用紙30枚以内
- ◇締切日　昭和41年3月末日
- ◇発表　昭和41年5月下旬　本紙上
- ◇賞金　入選（一篇）2万円　佳作　5千円
- ◇送り先　京都市左京区吉田京大構内、京都大学新聞社小説係、（原稿には、住所、氏名、大学名、学部、学年、年令を明記のこと）

なお、版権は本社に属します。原稿はお返ししません。

京都大学新聞社

TCM フォークリフト ショベルローダー ストラドルキャリヤ トラクターショベル 東洋運搬機株式会社
TCM MFD IN JAPAN UNDER LICENSE FROM CLARK EQUIPMENT C.A U.S.A

梁山泊 第五次復刊第一号・十二月二十日発刊!! 学園評論 ¥二〇〇円 京大学園評論社
GOGOたる非難の内に第2号発刊!! 血湧き肉躍り、しかる後頭骸骨が段々と痛くなる。革命思想の力動点は全にここに移動した!! 万天下の脳味噌ここに結集!! これを読まずして人間を語る勿れ!! 革命を語る勿れ!!
第2号—学園評論復刊準備号— ¥100
極秘書簡—奨義・日本極左戦術　松田政男（獄中よりの書簡）
猥褻オルグ秘伝……平岡正明
右翼反対派・サンダーボール……田辺繁治
胎教……三好秀よ
陰謀交差点……諸富洋治
どうぞはてさて……夕希ち
北東通の時の時……山本みよ五郎
65'12.1発行
京都大学学園評論社. 振替 京都市左京区吉田 京大構内. 21700

出版目録送呈
講座現代社会学 全3巻完結! 第3回配本/発売中! 3社会意識論 田中清助編集 ¥550 現代における実践・組織・認識の課程を追求し、意識の本質と内容をめぐる理論的問題および社会意識の動態を考察する創造的野心作!
現代修正主義とはなにか 榊利夫著 ¥250
真田是著 現代社会学と社会問題 〔学術選書〕¥880 社会問題の研究は政治的・階級的イデオロギーによって影響されるとの視点から、体制強化を目的とする現代アメリカ社会学を中心にブルジョア現代社会論の批判を展開しつつ、社会運動を社会問題理論の実践的な検証構造としてとらえ、社会問題理論の本質とその〈変質〉を追求して、社会問題の克服の方向を探ろうとするマルクス主義社会学の新しい成果!
宮川実著 恐慌 その理論と現状 〔青木新書〕¥280 現在の日本経済をおおう不況の根源はなにか—マルクス主義経済理論の正しい発展のうえに立ち、具体的な諸現象のなかをつらぬいて作用している恐慌の法則を平易に説明し、これらを資本主義の全般的危機の第三段階である日本の歴史的具体的な諸事情の複合的結果に生じたものとしてとらえた待望の書き下ろし。
江口朴郎・岡倉古志郎・蠟山芳郎監修 アジア・アフリカ研究入門 四六判・¥850 アジア、アフリカ、ラテン・アメリカをどう把握するか？ その研究の目的・姿勢・方法をどこにおくか。転回期に立つ世界史の中での各地域を一体とした歴史叙述、政治経済構造、帝国主義と植民地問題等の全体的把握とともに、各国別の現代史、政治経済、社会思想に関する研究の到達点と問題点、今後の課題を明らかに関する、わが国で初めての綜合的研究入門書！
東京神田神保町一 振替東京三六五八二 青木書店

新興出版社
労務管理と労働運動 加藤尚文著 B6判美装/600円 〝経営学ブーム〟〝日本的経営論の流行〟にたいし、常に科学的批判の立場を堅持してきた著者最新エッセイ！ 資本の高等戦術としての労務管理を実態・問題点・合理化と追求し、今後の姿にまで言及した、社会主義的サラリーマンの「卵」も必読の良書。
国民文化日記 平和と民主主義のための 活動日記 文庫判型 250円(〒共) ●ポケット型 130円 ●現代日本の第一線で活躍中の学者・文化人の住所電話専門・大学研究所諸団体名を収録した唯一の実用日記他満載
東京都千代田区富士見町1／振替東京116627

W・G・ランシマン 川上源太郎訳 現代の政治学 B6判 ¥490 イギリス新進気鋭の政治学者による野心作。マルクスとウェーバーの批判的検討の上に現代政治学の現状と課題を明らかにする。これは、入門書であると同時に反省の書でもあろう。
清水幾太郎著 精神の離陸 〈現代人叢書〉B6判 ¥480 未来を拓く思想は何か！ 抽象芸術、電子計算機、ビュロクラシーなど、興味あるテーマに光をあてて新時代をデザインする精神活動の必要を説く。
フランス政府1985年グループ 1985年—変わる人間 変わる社会 政府の委嘱によって結成された1985年グループが、あらゆる角度から予測した20年後の人間と社会。英知が探りあてた新しい世界像。30日発売 ¥480
竹内書店 港区青山北町4—105 振替東京90146

一九三八年秋、国際義勇軍がバルセロナから去る日、ドロレス・イバルリは、わななく情感をおさえて、「あなた方は歴史です。あなた方は伝説です」と語りかけた。民衆に見送られ、スペインを後にする兵士らのなかには、ただ疲れ、望郷の念にのみかられていたものもいただろう。だが、しかし、彼らはまちがいなく英雄の群れだったし、はげしい日々を戦いぬいた行動者たちだった。
唯物論美学にとって、いつでも必要なことは、より人間くさいものがそこに在ることだ。
■斎藤竜鳳／遊撃の思想 四六判美装／価六八〇円 三一書房

日韓闘争の中間総括

佐藤内閣の暴挙
体制危機の直接反映

尾崎洋

—日韓闘争の中間総括—

十一月十二日未明、日韓条約は議長発議という前例のない方法で衆院を通過した。政府自民党は、社会党のウラをかいてうまく最大の難関を突破したというわけである。

しかし、僕らはくじけない、可能性を求めて最後まで闘いぬかねばならない。以下、僕は、闘争前進の糧に資していただくべく、闘いの中間総括を提起したい。

〈市民主義者と日韓闘争〉

第一に中間総括すべきは、佐藤内閣の姿勢についてである。

僕らは、これを単に〃佐藤的政治〃ととらえてはならない。あの強引な方法は、支配階級のゆきづまりそのものの反映である。不況に象徴される現下の危機は、政府自民党の政治をして、大きく転換させつつあるのだ。政府自民党の結束をみよ。「寛容と忍耐」の時代はすぎた。—僕らは、このことをまず認識しなければならない。

第二に、この日韓闘争において市民主義者が登場しなかったことの意味を中間総括しなければならない。一体、安保闘争においてはなばなしく闘争の一翼をになった市民主義者・近代主義者がどうして日韓斗争に立ちあがらなかったのだろうか?

僕らは、安保以降市民主義者の一部が変質したことをみなければならない。清水幾太郎は世界を階級矛盾においてではなく国家間問題としてとらえるべきだと表明し、南北問題への関心を示している。中野好夫らは、自衛隊は国家に必要だとして、賛成をブツに至っている。桑原武夫は、万国博の起草者になり「国力」示威に加わっている。

いわば、総じて、ナショナリズムへの「移行」をなしつつあるのだ。いや、これらの人々は、もともとナショナリストであったのだ。それは、彼らの思想変歴をみればわかる。戦時下、日本帝国主義の苦境にあっては、彼らは、ファシズムをとなえた。そして戦后、米ソの谷間では背のびしても無理だというわけで、絶対平和、非武装を主張した。ところが、日本の「国力」が「充実」すると国家主義的(ナショナルな)視点からそれをふまえて新たなうごきをしはじめたというわけである。だから、彼らにとっては、すでに日韓条約は「悪」ではなくなっているのである。これが、かつての擬似市民主義者が、日韓闘争に決起しなかった所以である。(彼らは、日本帝国主義の苦境の中で再びファシストに回帰するだろう)

ところで、市民主義者の中には、この擬似市民主義者の他にもう一つのグループがある。丸山真男とか、大塚久雄等、戦前からの一貫した市民主義者達である。

これらの人々は、なぜ、日韓闘争に登場しえなかったのであろうか。

それは、市民主義、近代主義そのものに由来しているのである。このことは諸帝国主義下の市民主義者の現実をみれば一層明らかである。彼らは、市民社会の「平和」に夕眠をむさぼり、自国支配者の帝国主義的膨張を黙認している。(ただ、帝国主義的膨張が反動と暴力としてハネ返ってきたときにのみ国内平和をおかしたり、あるいは彼らは、立ちあがっているだけである)すなわち、市民主義の階級的視点の欠除は、帝国主義の免罪としてあらわれるのである。日本の真性市民主義者の現状況もまたこのことを示している。

以上、日韓闘争の現在迄の経緯は、擬似市民主義者のナショナリズム的性格と、真性市民主義者の親帝的性格を、かいま明らかにしたのである。

まことに、日韓闘争の徹底的な展開と指導は、階級的視点において世界をとらえ、帝国主義的膨脹の帰結を予見し、いわば、状況を先取できる部分においてしかなしえないのである。

〈既成左翼と日韓闘争〉

日韓闘争の中間総括の第三として、僕らは、日本共産党の日韓闘争をみなければならない。

まず、第一にその日韓条約の位置づけであるが、彼らはこれを米帝の陰謀とみなしている。しかしかかる主張は、単に日本の帝国主義的膨脹をバクロしていないというだけにとどまらず、実践的には日本帝国主義を免罪するという反動的な役割を果しているのである。

第二に、彼らはあらかじめ闘いを値ぶみし、そこからペースを逆算し、あとは、党拡大に全力をあげる。つまり、闘争を党員かく得の草刈り場としかみていないのである。その結果、闘争はいつもなおざりにされる。(勿論、僕は彼らの党拡大運動そのものは否定しない。しかし党拡大の闘争の推進を転倒してはならない。)

日韓闘争でも、彼らは集会—行列の円環運動を繰返すだけで、日韓粉砕を追求する姿勢など毛頭なかった。彼らは、どう闘うかではなく、何人で集会をやるか(「一万人集会」「二万人集会」等々)しか述べない。集会では「大衆」を「鼓舞」し「景気」づけるための美辞れい句がならべられる。…こちらは、方針をもとめているのに「団結」をとく(これは論点移動だ!)これこそ虚偽の運動でなくてなんであろう。

京大でも彼らはどのような闘いを組織したろうか?

風雲急をつげた十一月上旬におても、彼らは腰をあげず、そして日韓特別委での強行採決後ようやく腰をあげたものの、「スト権を確立しよう」(総評のダラ幹でもスト権の確立—これは、やるかも知れないということにしかすぎない—ぐらいのことはする前からうち出している)とか「抗議のハガキを出そう」と全く生半可な姿勢であり、十二日の強行採決後も地域集会でお茶をにごしたり(文学部学生大会では、彼らの方針は、五:八〇で否決された)東京派遣も十三日夜にやっと行なったり、十四日ごろから街頭署名にようやく出る等、闘う姿勢などどこにもなかった。いや、これでも彼らは「示威」ぐらいは行なったつもりらしいが、これは「示威」ではなく「自慰」であろう。それに、そもそも、あの決定的な時点において、彼らは一方では全国的に「全国青年スポーツ祭典」(十一月十四日)の宣伝を行なっていたのである。この間、かかるウソの運動に対して早大、教育大、法政大の学生党員が反発し、除名された。

第三に、僕らは、彼らの「七〇年階級決戦」論についてみなければならない。

今、仮りに「七〇年決戦」なるものを措定してみてもそれは、決して闘いをなおざりにして党拡大にうつつをぬかすことではないと思う。なぜなら、「決戦」に至る一連の過程で僕ら民衆がどれだけきたえられ、隊列を強めているかということこそ重要なのだから。組織がいかにふくれあがっても、共に闘う民衆が、訓練されていないならば、ダメなのである。これは、最近のインドネシア共産党の敗北においても示されていることだ。僕らは、日韓闘争をサボタージュしている彼らにこのような指摘をせねばなるまい。

第四に「五者共闘」なるものに対して一言ふれよう。

一体、五者共闘といっても、四者は単なるメッセージ屋ではないか。闘う方針と姿勢をもたない彼らはとにかくメッセージー屋をたくさんならべないと格好がつかないのだろうか、いい加減にインチキ共闘をやめないと学友から見はなされるであろう。とにかく、大学院及び生協、職組の中央をにぎっている党員諸君よ、メッセージよみもよかろうが、もう少し、諸君の「現場」で闘いを組織してほしいものである。

共闘は、まず各主体(組織)が、それぞれの現場で最大限闘うということを前提条件にしていることを忘れてはならない。

さて、日韓闘争の中間総括第四として、十一月十二日の「暴挙」についてふれよう。社共をとわず反体制側は、佐藤の「暴挙」を非難し「議会主義の擁護」とか「民主主義を守れ」とか主張している。しかし、思うに、かかる主張は佐藤らのむしろ思うツボではなかろうか。

支配者たちは強行突破するには、あのように暴挙という社会的波紋を投ぜさせざるをしなかったのであるが、一旦、社会は波紋を投じた後は、彼らは、その波紋が静まることを希っている。議会制民主々主義の幻想性が復活し、秩序が回復することをねがっているのだ。かくして、「民主々義を守れ」とか「議会主義の破壊を許さない」なんて言うことは、むしろ、左から秩序回復に手助けしていることなのだ。僕らは支配者たちが投じた波紋を、むしろ、僕らの憤激のうねりとして寄せ返さねばならない。暴挙には、実力で!これこそ民主主義だ。青年労働者や学生が行なっている国会前スワリ込みを更に拡大し、生産点でも最大限の闘いを組んでいくことなのだ。

社共のようにこのような原則をわすれ、秩序回復の要求をしてみたり、安易に国会解散を主張したりするヤリ方には、僕らはどうもシックリしない。

× ×

以上僕は、大きく四点にわたる中間総括を提起したが、とりわけ第四の点をふまえ、僕らは残された日々全力をあげて日韓粉砕闘争を推進しよう。しかも政府自民党の攻勢は物価(国鉄運賃値上げ今臨時国会で決定)からもなされている。日韓粉砕、運賃値上げ阻止のスローガンのもと、今臨時国会と全面的に対決しよう。反戦青年委員会を強化し、闘う労働者学生の連帯を深めよう。

(理三回生・府学連委員長)

書評

サルトル ボーヴォワールの路線を絶対化
模範生の身上報告書

生田耕作

ボーヴォワール著 或る戦後

最初の数十ページで、わたしはいさぎよく書物を床にたたきつけるべきであった。批判の最高の形式は沈黙であり、一冊の書物にたいする、一人の著者にたいする、最高の批判形式は「読書の中絶」にあるからだ。書評の義務にせまられ、自らに苦役を課する思いで、読みつづけ、上・下二巻、千頁近い大作に目をとおしたあと、いまわたしは、自ら招いた優柔不断の代償として、不愉快な重労働のあとにつきまとう後悔と、いいようのない腹だたしさに向い合わされている。わたしに残されたものとしては、首尾一貫した書評ではなく、この憤ろしさの原因究明と、報告があるだけである。

ボーヴォワールの自叙伝「或る戦後」には、題名が示すとおり、時期的には第二次大戦直後からアルジェリア戦争の終りまで、即ちパリ解放、戦犯問題、冷たい戦争ドゴールの進出など社会的にも政治的にも多事多難をきわめる複雑な時代が取扱われている。著者個人の歴史として見れば、前作「女ざかり」の最後ではまだほとんど無名であった彼女が、サルトルとともに、一躍フランスの代表的知識人となり、実存主義が世界的な脚光を浴びる、華やかな活動期が描かれている。その間に、カミュケストラー、ジュネ、ジューヴェメルロー・ポンチイ、ヘミングウェイ、リチャード・ライト、ネルソン・アルグレン、ヴィットリーニなど、国際的顔ぶれにわたる、著名作家、芸術家、政治家、ジャーナリストが次ぎつぎと登場し、さらに舞台は、アメリカ、ドイツ、スペイン、モロッコ、アフリカ、南欧、北欧と、めまぐるしく展開する。表面的には、いちおう、時代的広がりと、空間的奥行きを兼ね備えた、戦後ヨーロッパ社会の壮大パノラマの外観を呈している。全巻の中程に押入された「間奏曲」部会で(長篇シネラマ映画の中間休憩をわたしは連想させられた)、著者はこの作品の意図と手法にかんして、自己省察ふうの試みを行なっている。〈・・・世界を知る、という私の計画は、世界を表現するという計画と密接に結びついているからである。私の好奇心は若い頃ほど野蛮でなくなったけれど、欲張りな点はほとんど変っていない。人は、「これでもう知らないことはない」ということは決してないのだから、「これ以上学ぶことはない」ということも決してないのである。〉(邦訳二九七頁)たしかにそのとおりであり、この言葉にかんするかぎりは、異議をさしはさむ余地はない。だが、実際にわたしたちの前に差し出されたものはどうであろう?彼女が描きだす「世界」の「事物」は、なんと平板で、ウスッペラであることか。(訳者の「あとがき」によれば、この作品の原題は直訳すれば「事物の力」であり、個人の意志に関係なく働く外的な事物を意味しているそうだが。)そこには真正な意味での、なんらの発見も見出されない。風景は書き割り程度の単純さに還元され、著者の観察と理解は社会科の教科書程度で概念性と画一性の城をこえていない。灼熱の果てしないアフリカ砂漠はエキゾチックな隊商を点出し、ノールウェイの入江は神秘的でロマンチックな水をたたえ、貧乏人はおしなべて不幸で、ブルジョワは総じて卑劣漢(サロー)で、抵抗運動家は英雄で、協力派はファシストで、仲違いした、すなわちサルトル=ボーヴォワール路線から離脱した旧友は、いっきょう「反動化」の烙印をおしつけられる(カミュ、ケストラー、シローネ、ルーセルの場合)。

こうした単純化への志向は、ほとんど随所にうかがい見ることができる。もっとも端的に示されているのは、対独協力戦犯作家ロベール・ブラジラックの死刑判決にさいしての、著者の反応である。「……彼は告発者たちを平然と見返し、判決がくだったときも身じろぎひとつしなかった。」ブラジラックの潔よい末路を報道記者風の無感動さで記録したあと、即座に彼女はこう断罪する。「私の眼には、この勇気は汚名をそそぐ効果などまったくなかった。自己の行為よりも死に方を重んずるのはファシストの常なのだ」この個所を読み終えたとき、わたしは唖然となり、この言葉の発言者にたいして決定的な失望を味わずにはおれなかった。ブラジラックをも含む対独協力作家の戦犯問題の複雑性についてはわたしは以前にもこの紙上で、簡単な問題提起のかたちではあるが、触れたことがある。「ファシストの常」というボーヴォワール的断定には、あらかじめ用意された認識拒否が、たんに状況即応的な概念操作があるだけだ。ここでもまた、さきほど指摘した皮相な現実認識を、はなはだ哲学者らしからぬ(ボーヴォワールは哲学者のはずではなかったのか)非弁証法的思考形式を、うかがい見ることができる。ファシストをたんに一個の「他者」自らと全く別個な人種、一種の怪物的・非人間的存在として片付けさる、自己別格化の精神(これは「恐るべきもの」に目をつむる、硬化した遮断精神の裏返された一面とも考えられる)、そうしたものからはわたしたちは創造的思考をなにひとつ期待できない。ファシズムとの対決の途としては、対象を臆せず見つめる。止揚を通しての超克以外にはありえないであろう。

自己満足的、自己弁護的傾向はボーヴォワールの行動全般にしみついており、随所に世俗的名声への顧慮のかたちで現われる(ときとしてこれは、実感のともなわぬ世俗無視的空言のかたちをとることもある。その結果彼女の自伝はスキャンダルの欠如した、模範生の身上報告書風の色あせた、ブルジョワ的な(皮肉にも彼女の毛嫌いする)性格のものに仕立てている。

ミッシェル・レーリスの驚異的な自己解剖記録「成年期」をお手本に、弁明なしに自己を説明する殉難随筆(エッセー・マルチール)にたいする好みを持って出発したはずの自叙伝の試みは、一滴の血も流さぬ、お上品な自己弁明に堕してしまった。(紀伊国屋書店・B六判・上巻三五〇頁・下巻三九六頁・五三〇円・五八〇円)

(京大教養部助教授)

新しい方法論 〃入門書〃として最適

梅原猛

E・フッサール著 現象学の理念

いつか作家、高橋和己と話しをした時、彼はこのように語った。「私はフッセルの影響を受けたのです。京大在学時代、専攻の中国文学を学ぶと共に、三宅剛一教授のゼミでフッセルを読んだのです。」高橋和己の小説の、類稀れな深遠さと重厚さと難解さ、私はそれらの特性が専ら、中国文学からの影響から来たのだと思っていたが、フッセルからも来たのである。そういえば、彼の小説のねばり強い人間の意識の分析と、観念的な巨大な体系への陶酔も、どこかフッセル的である。フッセルは、三宅教授のゼミを通じて、中国文学の知識と結合し、ここに高橋和己なる一人の作家を生んだといってよいかもしれない。

西田、田辺教授が去ってから、戦後、京大の哲学科は、二人のフッセリアンを主任教授として迎えたのである。山内得立教授と三宅剛一教授。山内教授が、主に私達に教えたのが、客観と分析の精神であった。西田、田辺哲学の精神は、主観的、あるいは主体的で、総合的であるが、それでは駄目であり、あるがままのものをあるがままにみとめ、物をねばり強く分析してゆくことが真の哲学の精神であるというのが、山内教授の主張であった。山内教授のこの主張は、主にボハツアノからブレンターをへてフッセルに至るドイツ客観主義哲学の伝統に立ち、教授はいたずらに絶対主体性だとか、絶対無だとか、媒介の論理だとか、をクソ真面目に、愚劣な空論に浮身をやつす田辺哲学一派に、痛烈な皮肉をとばしていた。この山内教授の主張は、ほとんどすべての学生に理解されなかったが、私は教授の「客観性と分せき」の精神の重視に、むしろ主体的感激を覚えた数少い学生の一人であった。

山内教授の後継者である三宅剛一教授と山内教授以上の熱心なフッセリアンであった。教授はゼミに「純粋現象学と現象学的哲学への理念」、俗にわれわれのイデーンといっている本を、繰返し使った。三宅教授の日頃の主張は論理のカラクリを止めよということであった。西田、田辺博士の立場は教授にとって頭でこしらえられた論理であった。頭で論理をこしらえて、物をゆがめて見ずに、物を物そのものとして見よ。三宅教授は、思弁哲学の上からの態度をしりぞけて、下からの態度、経験重視を強調されるが、この経験というのは、勿論、実証主義の意味の経験ではなく、フッセル的な意識内在的な経験であった。三宅教授はまたフッセル的なエポケー(判断中止)の態度を、人生の態度として愛していられた。当時私は三宅教授のフッセルのゼミに出るより、すべての生き生きした情熱が一種の空しい喜劇に化してしまうような教授のエポケー的人生態度によって見られた人間観察を聞くのを何よりの楽しみとしていた。

教授は、現象学は使わねば駄目だといわれた。何故なら、現象学は一つの哲学の方法である。哲学の方法としてそれはある新しいジカルを開明しなければならぬ。つまりそれを使って現実のものを分析する。たとえば、フッセルから出たM・シェーラーが羞恥の分析をし、ハイデッガーが不安の分析をしたように、現象学はそれを使って新しい経験の領域を開明しなければならぬ。私はこの三宅教授の主張に大賛成であり、日本では現象学を使った独創的哲学は、九鬼周造氏の「いきの構造」ぐらいではないかと考えていたが、後に私は人が「笑いの哲学」とよんだ笑いの研究に入ったのも、この三宅教授のサゼッションによるものであった。

フッセルの現象学は、一つの新らしい方法論である。それは一切のものを意識に還元し、その先験的意識の構造を問うという方法である。ねばり強い先験的意識構造の分析、おそらく、それは一切を物質に還元する唯物論も、一切を科学的経験に還元する実証主義ともちがった新しいものの見方である。このような方法の影響の下に初めて実存主義の哲学が成立して来たのである。いかにハイデッガーが、いかにカルペルスが、いかにサルトルがフッセルの現象学に影響を受けたのか。彼等は、いずれも空疎な議論にふけるより、この人間の内面的な存在を、現象学的方法によって深く見入って、ねばり強い分析を試みた思想家であった。私はもしマルクス主義の方法論が弁証法であるとすれば、実存主義の方法論は現象学であり、マルクス主義を研究するためにはやはり近代的弁証法の創始者であるヘーゲルを勉強しなければならぬように、実存主義を深く研究するためには現象学の創始者であるフッセルの研究に到らねばならぬことを確信している。

今、若き学究立松弘孝氏によりフッセルの講義である「現象学の理念」が訳されたが、原書は現象学の入門書として、適当である上に、立松氏の解説と註は、詳細にして要領よく、久しくフッセルから遠ざかっていた私も、著者の見事な説明に、もう一度フッセルを読み直し、著者とディスカッションをして見たいという気を起させたほどであった。厳密な学問的分析と、生命そのものの本質にたいするラジカルな問題提起と、訳者はフッセルの哲学の性格をそのように説明するけれど私は訳者の、翻訳と解説の態度の中にもこのようなフッセル的な精神の一端を見るのである。少し綿密な努力がいるけれど、この一冊の本を、出来たら原書と対照して読むことにより、専門以外の人も、あるいは他日「悲の器」のようなものを創造する契機になるのかもしれない。

(みすず書房刊・A五判・二八〇頁・九五〇円)(立命館大学助教授)

武谷・小倉氏を批判
科学史の見解にはほぼ賛成

藪内清

広重徹著 科学史の有効性

広重君の新著「科学と歴史」には、彼の見解がきわめてはっきりと表明されていて面白い、という批評を、私は若い友人から聞かされていた。こんど一読する機会を得たわけである。特に面白いのは第一章から第三章まで、武谷三男氏と故小倉金之助博士の科学史観をかなりあけすけに批評している。この二人は科学や科学史のすぐれた研究者であるばかりでなく、思想家としても著名である。ことに武谷は現に物理学、とくに素粒子論研究における指導者の一人であり、また科学史研究を通じて導き出された三段階論は、それが物理学研究への方向を指し示すものとして、一部の物理学者から高く評価されている。

武谷氏より少しおくれて京大物理学科を卒業し、現に名大の物理学科を指導する坂田昌一教授の如きも、その一人と言ってよかろう。同教授は昨年八月の北京科学シンポジュウムに団長として出席したが、この会合で三段階論を披露し、それが中国人科学者に深い感銘を与えたようである。これまでも広重君は武谷氏の説を批判してきたが、この書物が出て、武谷氏を尊敬する若い物理学者から、逆に広重君がかなり批判されたと聞いている。広重君はまず武谷氏の三段階論をとりあげ、「科学史の研究が三段階論を基礎としてのみ可能となるというような考え方はまずしりぞけなければならない。三段階論が日本の素粒子論を世界に卓越したものに導いたという話も、歴史的によく吟味してみると、たぶんに伝説に近いことが判明するのである。」ときめつける。もちろん事実をあげて論証しているが、こうきめつけられると、武谷氏の崇拝者が広重君を攻撃するのも無理はない。広重君は「科学史の有効性はどこにあるか」という問いは、けっきょく歴史とは何かという古くて新しい問いに帰するであろう」とし、E・H・カーの書物に「歴史とは過去と現在との対話である」との文章を引き、結論的には「現在に批判的に対処することを教える」ものとして科学史の有効性を認めている。

次に小倉博士に対する批判になると、こうした科学史の有効性に関する立場からではなく、小倉博士が民主主義と科学との深いつながりを強調する点に疑問をなげかける。小倉博士は「封建的官僚性は科学的精神の涵養を妨げ、自然科学の進展上望ましからぬものであった。それに反して、他の条件が同一なる限り、民主主義政治の社会において、科学的精神は伸長し、自然科学の研究は進展する」ことが科学史の一般的法則として成立つことを示そうとした。戦後、小倉博士が民科の委員長として活躍するようになったのも、こうした思想に裏付けられたためである。この見解に対す広重君の批判は、こうした直線的な物の考え方は科学的哲学蒙主義とも呼ばれるべきものであり、それはまた科学至上主義に通ずることを指摘する。また武谷氏の三段階論、さらにその技術論もやはり同様な考え方に立脚したものであると批判する。広重君は、科学の発達は歴史的、社会的に規制されるものであり、民主主義の昂揚期に科学が発達するという簡単なテーゼでは、重要な事実が見落されてしまうと論じている。

広重君の文章は闘士まる出しのところがあって面白いが、武谷理論がどの程度物理学の研究に役立っているかを知らない私には、そのまま広重君の説を受けとることはできない。しかし科学史に関する見解の大すじについては、私はほぼ同君の説に賛成である。私は科学史の研究が直接に自然科学の研究に寄与すべきだとは考えていない。一般の歴史学と同じく、直接的な有効性を人々に明示することは困難である。従って科学史がアカデミックな世界で市民権を獲得するには、やはり科学史家がすぐれた科学史上の論文を書くほかはない。面白くても、評論はあくまで評論である。

(みすず書房刊・B六判・二九二ページ・七五〇円)(京大人文研教授)

今週のベストセラー

生協地下書籍部 ①「人間の建設」(新潮社)②「世界の大思想・レーニン」(河出書房)③「思想の歴史8、近代合理主義の流れ」(平凡社)④伊ケ崎暁生著「大学の自治の歴史」(新日本出版社)⑤高橋詢他著「有機化学」(塙書房)

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの自伝三部作完成

ある女の回想3 或る戦後

朝吹登水子・二宮フサ共訳 上巻五三〇円 下巻五八〇円

三年の沈黙を破り完成したこの巻では、アルジェリア独立までの戦後が扱われている。変転極まりない世界情勢と、戦前・戦中にも増してのしかかる社会の重みに耐えて、如何に人間を生き、かつ生の充実を求めて闘ったか? このメモワールはそのすべてを物語っている。

ある女の回想1 娘時代 / ある女の回想2 女ざかり

東京 新宿 本店 紀伊國屋書店

筑摩叢書

——こころに残る良書・歴史に生きる名著——

エラスムス ——宗教改革の時代 ホイジンガ 宮崎信彦訳

今世紀最高の文化史家ホイジンガが、敬愛する中世最大の文人エラスムスを描く。当時ヨーロッパ社会の国際人であったエラスムスが中世末期の混迷と暗黒の時代をいかに生きたか、その浩大な書簡と著述を克明に辿りその生涯と思想を明らかにする。 480円

戦後文学の回想 中村真一郎 ¥290	中華飲酒詩選 青木正児 ¥420
人間最後の言葉 アヴリーヌ 河盛好蔵訳 ¥420	明治文学史 中村光夫 ¥380
正法眼蔵随聞記 水野弥穂子 ¥450	大正文学史 臼井吉見 ¥380
柳田国男対談集 臼井吉見編 ¥420	昭和文学史 平野謙 ¥480
わが心の遍歴 長与善郎 ¥450	十二年の手紙 上下 宮本顕治・宮本百合子 ¥380
わが古典鑑賞 小島政二郎 ¥350	ニッポン日記 M・ゲイン 井本威夫訳 ¥520
古典ギリシア 高津春繁 ¥680	無用者の系譜 唐木順三 ¥380
斎藤茂吉ノート 中野重治 ¥420	新版 中国の赤い星 スノウ・宇佐美誠次郎 ¥450
中国書画話 長尾雨山 ¥680	古代芸術と祭式 ハリソン 佐々木理訳 ¥400
聴聞草紙 佐々木高善 ¥480	民俗学について 大藤時彦編 ¥420

東京神田 筑摩書房 小川町2

京大生のオアシス

コンパ、ご宴会に、気軽に御利用下さい。〝大将軍〟自慢の味と値段で学生諸君のおいでをお待ちしています。

和食・洋食・中華料理 大将軍

京都駅前タワービル西 TEL(37)—0990

大宮店 ロース焼肉・中華料理 四条大宮阪急前 TEL(84)9162

◇両店共、お座敷料・サービス料は一切不要です

490円 新企画第一号 のフルコース

スープ、フィッシュ、アントル、野菜サラダ、デザート、パンそしてコーヒー

L'ambre

名曲の調べ……静かなムード 語らいと憩いは地下喫茶部へ

●あらゆるご集会、コンパ、ご招待に地下をご利用下さい。ご予約を承っております。

□百万遍らんぶる へもどうぞ

名曲レストラン らんぶる くまの店

京・クマノ交差点ドル 電⑦4251

皆様のソ連図書専門店を開設致しました

◆只今1966年度 ソ連新聞雑誌のご予約うけたまわっております。

(ご希望の方には総合カタログをお申し込み次第お送り申し上げます)

ロシア語原書

■レーニン全集 1巻〜55巻	各冊	¥280
■マルクス・エンゲルス全集 1巻〜37巻	1セット	¥12,000
■チエホフ12巻全集	1セット	¥9,000
■ゴーリキー30巻全集	1セット	¥28,800
■露和日辞典(ザルービン監修)		¥2,770

日ソ図書センター大阪営業所

大阪市発我野町79・新東洋ビル TEL (313) 2730